

【講演会等報告】

特別企画 座談会「北海道民族学会の回顧と展望」報告

岩崎まさみ

北海道民族学会は今年度で創立 35 周年を迎えました。また平成 26 年には本学会の第 5 代会長であり、現在は顧問である岡田淳子先生が北海道文化賞を受賞されました。本年度第 1 回研究会では、この二重の喜びを会員の皆さんと分かち合い、また当学会の歴史を振り返る事を通して、北海道民族学会のこれからを考えるための場として座談会を企画しました。岡田淳子先生を囲んで、前会長である津曲敏郎先生、そして若い世代の代表として中田篤さんに登壇をお願いし、また会場の皆さんからも多くの意見をいただくなど、熱気に包まれた座談会となりました。

本記録はこの座談会の様子を皆さんに伝えるべく、事務局が録音テープを起こし、中田篤さんを中心とした発言者の皆さんの協力を得て確認作業を行い、当日の司会を担当した岩崎がまとめたものです。

メンバー

岡田淳子 (顧問)

津曲敏郎 (前会長)

中田 篤 (会員)

司会 岩崎まさみ (会長)

---

**岩崎**—— 北海道民族学会は最初の頃は、どうだったのか、創立のあたりから思い出話やエピソードのようなものを話していただいて、私たちの歴史的な理解を深めていただければと思います。

**岡田**—— 当時の書類をかなりたくさん持ってきたのですが、古い頃の目ぼしい記録は見つからないですね。

私の記憶では、札幌大学の教授をしていらした宮良高弘先生が北海道民族学会をつくろうと発案されました、それは間違いありません。その当時は、日本民族学会がとても大きくなった時期でした。会員数も増えてそれまでのままでは活動がむずかしくなって、支部を作る機運が芽生えていました。すでに、いくつかの支部ができており、北海道にも支部を作るのが良かろうということで、宮良さんが発案してくださったのだと思います。だから私は、宮良さんが初代会長になるに相違ないと思っていたのですが、ちょうどその年、日本民族学会の理事をしていて、北大北方文化研究施設文化人類学部門にいた岡田宏明が会長に推挙され、初代会長になりました。ここからは、パーソナルコミュニケーションの部分が多いのですが、岡田はそのことを気にしていたらしく、早く宮良さんに回さなくてはいけないと言っていました。4 年ぐらいで宮良さんに代わったと思っていたのですが、正確な記憶ではなかったようですね。



写真1 座談会の様子

岩崎—— ちなみに、ご存じない方に説明しますと、岡田宏明先生と淳子先生はご夫婦でいらっしゃいますので、そういう背景があって今の話があります。

岡田—— 私はその後、職場を代えたりしたものですから、北海道民族学会の会合に出られないことが多かったことを思い出しました。きっと 88 年までやっていたのですね。

岡田宏明が会長の時には、北大文学部の助手の方が事務局をしてくださっていました。二代目の宮良さんの時には、林美枝子さんも事務局をしてくださったり、だいぶ苦労をおかけしたと思います。三代目、和田完先生の時には、和田先生がそのころ小樽商大にいらっしゃいましたから、同じ小樽商大にいらした津曲敏郎先生が事務局をしてくださいました。和田先生と私は同じとき日本民族学会の評議員をしていましたので、その機会に北海道民族学会のお話をしたことを思い出します。次の谷本先生の時には、たしか、開拓記念館で出利葉浩司さんが、事務局をやってくくださったと思います。

その次、なぜか私が会長をやることになりました。私のときは、佐々木亨さんが引き受けて北大文学部で事務局をやってくださいました。次が津曲先生で、その後を岩崎さんをお願いしたということで、なんだか、古いことではなくて新しいところまで続いてしまいましたけれど、会長と学会の事務局と事務局長とそれくらいを申し上げて、また後ほど思い出したら、お話しします。

私が会長をした時期は激動の時代でした。そのあと、津曲先生がここまでもってきてくださった、という気がしております。それで、その激動のこともお話しできるのかなと思ったり、あまり話さない方がいいのかと思ったりしております。じゃあ、第一弾目はこれくらいで。

岩崎—— 本当は、最初にお三方を紹介するべきでしたが、ここで紹介させていただきます。今お話しいただいた岡田淳子先生、前会長を務められた津曲先生、それから、若手代表ということで中田さんです。

津曲先生は昔の写真をいろいろと持って来てくださったんですよ。

津曲—— はい。岡田淳子先生が激動の時を切り抜けてくださったおかげで、そのあと会長を引き受けまして、ここにありますように、2005 年から 12 年度まで 4 期 8 年ずるとやらせていただきました。その前に歴代の会長はじめ先生方、とりわけ岡田先生のご尽力でいろいろな問題がクリアされたり、それから、今日の会誌のもとになる『通信』が、



写真2 小樽商大での研究会（1991年12月）

これも淳子先生のご尽力で発刊されたりして、現代の会誌の基礎を作っていただいたわけです。それを受けて、昨年度までで11号、会員の皆さんの論文等をはじめ、充実した内容で続けることができたかなと思います。

で、この「沿革」というのは実は、あまりご存じない方もいらっしゃるかと思うんですけど、この「沿革」となると、淳子先生に「北海道民族学会創立の頃」という文章を2005年に書いていただきまして、それをHPに載せています。大変興味深い創設期のころのお話を書いてくださっていますので、ぜひ一度ご覧ください。

写真は探したんですけど、実はあまりありません。1枚だけ、これは和田完先生が会長のとときに、私と大島稔先生が事務局を担当しまして、小樽商大で研究会をやったときの写真です（写真2）。当時はこんな立派な垂れ幕を用意していたんだなあと感心しています。もう1枚このときの写真があります。研究会のあと、小樽市内の運河通り沿いにダニーデンというニュージーランド料理のお店があって、今はもう残念ながらなくなりましたが、そこで懇親会をやりました。宮良先生、谷本先生と淳子先生も写っています。古い時代の写真というのは、それくらいしか私の手元にありませんで、最近ではHPに載せるために研究会の様子とか残すようにしているんですけど、昔の写真はないですね。この研究会のときの案内状も出てきましたが、まだ、メールが普及していないので、こうした文書で会員に送ったり、ハガキに印刷したりしていたのを思い出します。

これは、民族学会の写真ではないんですけど、関係の方たちがたくさん写っているので紹介します。網走市で行われた北方民族文化シンポジウムのときの写真です（写真3）。このシンポジウムは、例年北海道民族学会が後援させていただいているので多少とも関係があるかと思って紹介させていただく次第です。今年が30回目ですので、19年も前になります。ここにも、いろんな方のお顔が写っています。岩崎先生もいらっしゃいます。それからちょうど10年後の21回のときの写真もありました。中田さんも写っていますね。

このシンポジウムもよく長いこと続いていて感心します。そこへ北海道民族学会として後援させてもらったり、多くの会員の方が参加したりしているのはすばらしいことだと思います。

あと、今の会誌の前に『通信』という4ページか6ページくらいのものを年に1度か、多いときは2度3度と、出していたんですね。これも先ほどの淳子先生の思い出の文章のなかに書いてありましたけれど、最初に岡田淳子先生が始められたものです。北海道機関紙印刷という、北大の南門とJRとの間ぐらにある印刷屋さん、これも淳子先生が見つけられて、そこが割と安くてきれいに仕上げってくれるのでそこにしました、ということが先ほどの思い出話の中に書いてあります。この機関紙印刷というのは、ちょっと私事になりますが、私も実は思い出がありまして、私は高校時代、新聞局というのをやっていて、年に数回ですけど、学校新聞の編集作成をやっていました。そのときに使っていたのがこの機関紙印刷だったんです。後に私が学会事務局を担当したときに、この通信の発刊にかかわったことがありますけれど、そのとき何十年かぶりで機関紙印刷に行き、なつかしいなと思ったことがあります。この通信は、現代の会誌が出るまで引き継がれて、実はこれもあまり知られていないかもしれませんが、HPに全号PDFでアップされています。私が会長になったときにHPを創設して、この作業をした覚えがあります。その当時は、記事を書いた人にきちんと承諾を取るといったようなことがあまり厳しくなかったというか、もう載せてしまったものは仕方ないかなと思いますので(笑)、一度HPから見ただければと思います。

これに続いて会誌の方も11号になりましたので、何らかの形でWeb上で見られるように整備したいというのが先ほどの事業計画の中にもあった通りです。ただ、今の時代はやはり著者の承諾といった問題も考えなければならぬだろうなと思っています。で、『通信』から現在の『北海道民族学』という会誌になりましたけれど、その創刊号は淳子先生の会長時代に、林美枝子先生が編集されて出されています。そのときは『北海道民族学会会報』というタイトルで、A4判の大きさに出していますが、私の代から『北海道民族学』



写真3 第11回北方民族文化シンポジウム (1996年10月4日)

と改題して、判型も B5 判に変えさせていただきました。これにもいろいろ事情がありまして、本会の会員でもあるサッポロ堂書店の石原さんに、学会からこういうものが出ましたとお見せしたら、これはすばらしいけれど、大きさが小さくならないかと。本屋さんとしては、A4 判の本というのは扱いにくいんだそうですね。ですから、これはぜひ B5 判にすべきだとアドバイスをいただき、現在の B5 判に変更しました。会誌もますます発展していくことを願っています。とりあえず、私からはそんなところで。

岩崎—— ありがとうございます。

津曲—— 言い忘れました。この『通信』の題字も淳子先生のときに書いていただいたんですね。

岡田—— 椿坂恭代さんという書道で名の知れた方が北大の埋蔵文化財調査室で働いていらして、それだけの立派な字をぜひ何かに残したいと思ひまして、書いていただきました。そのときの約束として、この題字を使って出版物を出す限り、必ずあなたに一部ずつ送るからと約束したのですけれど、私ができる間はしますと（笑）。雑誌を A4 判にしたのは、その方が紙の上からも安上がりで、文字もたくさん入るからでした。

津曲—— 現在の会誌にしてからこの題字は、使ってません。ただ、HP のトップページには「北海道民族学会」というところまでを使っています。いい字ですよ。

岩崎—— ありがとうございます。次に、時代的には未来に向かって、若い世代のお話を伺いたいと思います。

中田—— 北方民族博物館の中田です。私はなにもお見せするものとかはないんですけども、学会の現状とか今後に期待することを話せというオーダーを受けております。若い世代の代表と言われたんですけど、私が最初にこの学会で発表させていただいたのは、たぶん 1997 年、小樽商大の和田会長の時代で、商大に行きました。そのとき発表者は私と和田先生と萩中先生で、それが始まりでもう十数年前になります。確かに、ここを見渡しましても、私より若い人あんまりいないなあという感じなんですけれど（笑）。それで十数年経っているという立場で、最近の状況として、この学会の良いところ、悪いところを考えてみました。

まず、良いところ。この学会は北海道民族学会という名称なんですけど、民族学いわゆる文化人類学だけではなく、考古学、言語学、音楽学、さまざまな関係分野の方たちが会員になっていて、非常に幅が広いという点が挙げられます。それから、大学の先生や民間の博物館の人間など、いろんな立場の人間が参加しているという多様性があるのも良い点なんじゃないかと思ひます。

また、ここ最近、発表者が少ないということが話題になるんですが、さっき津曲先生の写真を見ていたら、小樽商大での研究会は 2 時から 5 時までで、発表者が大島先生と津曲先生の 2 人でした。ということは、持ち時間が 1 人 1 時間半です。僕の時も同じような感

じだったと思うんですけど、そういう時代もあったということです。今も普通の学会と比べたら発表時間が長いとは思うんですけど、じっくり時間をいただけるというのも良いところなんじゃないかと思います。

それからいろいろ問題もありまして、発表者として手を上げてくれる人がなかなかいないだけでなく、せっかく学会誌をつくって報告の場が出来上がったのに、投稿する人が少ないという点が問題として挙げられています。

私は今、網走に住んでいるんですけど、地方大会というのが2009年から始まりました。一度記録を調べてみたんですが、北方民族博物館ではそれ以前の分も含め、北海道民族学会の研究会を3回やっていまして、最初は1998年です。この時は、細かい記録は残っていないのですが、記憶だと先ほど紹介いただいたシンポジウム(北方民族文化シンポジウム)の次の日くらいに企画して、シンポジウムに来た人に研究会にもそのまま参加していただくという感じでやりました。そのときの発表者が渡部裕さん、齋藤玲子さんという北方民族博物館の学芸員(当時)2人と宇仁義和さんという知床博物館(当時)の方、まあ網走在住の人ばかりでした(笑)。

そのあとに地方で研究会をやろうということが課題になって、その1回目を2009年に網走でやりました。そのときは、地方でやっても人が集まらないと反対していたんですけど、ふたを開けてみたら結構応募がありまして、6組の発表がありました。

**津曲**—— 2日間でしたね？

**中田**—— そうです。土曜日の午後に研究発表、夜に懇親会をやって、日曜の午前中に二日酔いで頭が痛いなかで研究発表の続きをやるというパターンでした(笑)。

それからそのあとに、帯広、函館でやっていただくという形がある程度できました。まだ1周しかしていないので定着とまではいかないのですが、最近では、2013年にまた北方民族博物館でやりました。ということで、会員も札幌在住の方が多いので、どうしても札幌開催の研究会が多くなるのは仕方ないと思うのですが、そういった形で時々地方でもやっていただきたいというのが今後の希望というか展望です。

一つ問題は、北海道第二の都市の旭川とか、釧路とか、網走よりも大きい北見とか、そういったところでなかなか研究会ができていないということです。会員の方がいないからできていないというのもあるんですけど、逆にやらなければ会員が増えないということもありますので、なにか考えてそういったところでもできればいいなあと思います。もう一つは発表する側の問題で、先ほども触れましたが、発表者がなかなか集まらないということがあります。これについては、過去の例を見ても分かるように、一人二人でもそれなりに面白いことになっていたと思うので、無理やり発表者を増やすことはないと思います。ただ、発表する場合には、なるべく有意義な発表をしていただきたいと思います。発表時間がたくさんあるので、自分が言いたいことをしっかり言うというのがありますが、できればそのあとの議論が膨らむような発表を心がけて欲しいものです。発表時間もちゃんと守っていただいて。

**若林和夫**—— すいません(笑)。

**中田**—— 発表の質とまでは言いませんが、ある程度発表内容がしっかり伝わって、そこでいろんな建設的な議論ができて、時間が足りないというくらいの雰囲気になり、研究会がもっと面白くなれば参加者も増えるし、投稿にも結びつくのかなという気がします。それから、この役を仰せつかるのにあたって、帯広畜産大学の平田さんにも意見を伺ってみました。彼の意見では、この学会は60~70人という小さな学会なので、できればもっといろんな道内の文化的な活動をしている団体とコラボレーションというか交流するような企画を考えていけばいいんじゃないか、ということでした。ここで紹介させていただきます。

**岩崎**—— ありがとうございます。いま、3人のパネラーの方からお話を伺ったんですけど、会場の皆様の方から質問なり、こういうことを聞きたい、あるいは自分はこういうことを考えているんだということがあれば、ぜひ聞かせていただきたいんですけども。

**林美枝子**—— 以前、専業主婦だった頃、自宅で事務局をしていました。もうお亡くなりになった和田先生が会長になり、事務局は津曲先生に引き渡しました。発表者が各回2人だった時期に私は夫の任地である北海道に移住してきて、指導教授だった故蒲生正雄先生の研究仲間である岡田淳子先生に本会への発表や入会のお声をかけていただきました。「研究者じゃなくてもいいのですよ」という声に励まされたのですが、あの発表の機会が、実は今の研究者としての自分に至る最初の一步だったと思うのです。そういう意味では本会は様々な人に研究を公にするチャンスを与えてきた場所でした。当時の発表時間は1時間でしたので、数十分の「日本民俗学会」や「日本民族学会（現 日本文化人類学会）」よりも充実した内容を発表することができ、会場の方たちから本当にいろんなご助言をいただくことができました。私は来月日本看護歴史学会の学術総会で、あのとき発表した内容に関連する研究で教育講演をいたします。北海道開拓における「姉の力」の文化から、公許女医第一号の荻野吟子の北海道での足跡をたどる講演です。今から20年近くも前にスタートした研究内容がここへ至ったことを思うと、あのとき会場にいた皆さまのご助言に今さらながら感謝しております。その後、運営委員会で「より多くの人に発表してもらおう」ということになり、大学院生や若い研究者に入会してもらおうきっかけになるのではと議論した記憶があります。現在は発表する方が逆に若い人ばかりになってしまったようにも思いますが、ずっと研究をしてきた方たちの研究経緯や、今何を研究しているのかというお話もそろそろ聞いてみたいとも思います。

**岩崎**—— ありがとうございます。私も今、とても面白い研究をしているので来年発表をしたいと思います（笑）。他に、質問とかコメントとか。

**若林**—— 僕、研究史をやっているために、いろんな若めの研究者を知っています。彼らが発表するモチベーション自体が低いのではないかなと思います。最近、僕なんかは普通に仕事をしているフリーな人間なので、時間があんなに研究をして発表をしないのか、なんでそんなにモチベーションが低いのかと最近考えます。結論としては、自分の話す内容を短時間で話すのにむずかしい内容をやっているのがまず一点あると思います。結局、研究が複雑化したことと、文化人類学といっても非常に幅広い分野を扱っている研究

者が多かったりするのです、それこそ前みたいに、1人1時間でできますよと宣伝して、たとえば、今回発表のロスリンさんなんかはまだ言い足りないような発表だったので、もうちょっと文化人類学的主張を視点に入れて分析するという手法をなんでとったのか、というところから話せる状況にしてみたら楽しいかなと思います。

**岩崎**—— ありがとうございます。たしかに、発表時間が30分、そのうちの20分から25分が発表で質問が2つか3つ。ある意味時間が区切られてしまっているところがあります。そうすると、言いたいことも言えなくて突っ込めない。ですから、時々今回は1時間やりますよ、というのがあってもいいのかなと思います。

**野口明広**—— 僕はこの学会で一度発表させていただいたことがありました。たしかあれは2000年の1月30日、雪の結構降った寒い日で、小樽から電車がでるかなと心配しながら開拓記念館まで行ったんですけど（笑）、僕ともう1人発表者がいて、聴いてくださっていたのが、谷本先生と出利葉さんの2人でした（笑）。そういう機会にしゃべらしていただいて、まあ1月30日というのが良くなかったのかと思うんですけど。時間があつたのは発表者が少なかったからなんです。現在のように、今日も4人の方が発表されて、聴きに來られる方がこんなにいらっしやると、非常に盛況だなあという印象を僕なんかは持つわけなんですよ（笑）

この問題どうしたらいいのかというのを15年ずっと考えていて、やっぱりそうすると、研究発表の時間を増やすというのも考えなければいけない。だから、午後の時間だけで発表者が2人だけだったから、ぼくも30分くらい話させていただいた気がしますけれども、だいたい、夏の研究大会は、まず役員が集まって役員会をして総会の議案の確認をした上で、研究発表があつて総会があつてっていうプログラムなんですよ。そういう日程を組んでいるので、どうしても午後から研究発表をしてそのあと総会ということにならざるを得ないところがあるんです。これから、若い人も含めてこの話の続きをここで話さなければいけないのかなあという気持ちに今なってきているんですけど、9時くらいに役員が集まって総会の準備をして、10時から研究発表をして、午前の部2時間で4人、午後の部2時間で4人と。8人くらいしゃべると。そういうような形でプログラムを組んでいくことにすれば、ある程度時間をつくれるのかもいれないんですけど、そこら辺の研究発表会と総会を行う日のプログラムの組み方そのものから変えていかないと。昔はそうだったというのは、今と基本的に変わらなくて、発表したい人が少なかっただけなんです。だから、もう少しそのやり方も考えていかないと若林さんの期待に沿えないんじゃないかと思えますし、考えていく課題の一つだと思います。

**岩崎**—— ありがとうございます。ほかにご意見は。

**栢谷隆男**—— 私が初めて出たのは1996年か97年。小樽商大で発表させていただいた後に、その場で懇親会でした。それがすごく楽しくて、こんな楽しい学会はないだろうと思いました。研究も大事ですけど、親睦のなかから生まれる部分と言いますか、「柔らかい」というのがすごく大事なんじゃないかと思いました。あと、昨年帯広百年記念館で研究会



を開催した時の特別企画（「音楽ってなあに～楽器の文化あれこれ鼎談～」）、「4人が音楽部会作ってコラボレーションしたら」と私が言い出したら、津曲先生が「いいねいいね」って言ってくださって。

それぞれ分野によって発表の仕方はいろいろあります。私は人類学の専門じゃないからよくわかりませんが、研究方法とか発表方法とかいろいろあると思うんですけど、私みたいに破天荒なのがあったり、ほっとするような企画をしたり、そういうのも一つの呼び物にしつつ、しっかりとした研究も発表していくべきかと。今、時間のお話がありましたが、じっくりやるというのも大事だけれど、逆にいうと20分のなかで収められなければなりません。音楽は時間芸術ですので、コンクールのなかで、何分と決まっていれば、1秒でも過ぎれば失格ですから。そういうところも意識しながら勉強していくのも大事かと。

**甲地利恵**—— 「柔らかい」という話がでましたが、柔らかいかどうかは別として、ここは専門的な学会であります。今日も一般の方で興味があるという方も沢山ご来場いただいているんですね。ですから、学会発表の研究会とはまた別に、一般向けというか、学会の扱っている分野に興味のある人に対して、有している知見を分かりやすく普及するという方向性も、学会が社会に対してなにを還元できるかという部分で考えていかなければいけないのかなと、今の話から思いつきました。

**岡田**—— 今の話に関連してなんですけれども、私は発表の時間をそんなに長くするのはなく、発表の後に皆で討論するような時間が多くとれたらと思います。それから全く違うことなのですが、日本民族学会の名前が日本文化人類学会に変わったことで、北海道民族学会も名前を変えなければいけないのか、だいぶ議論したことがあったんですよね。どうなのでしょう。民族学会でいいのでしょうか。民族学会では自分の研究分野は入りそうもないので、もっと広い名前にしてはどうかということもあるのではないかなと思うのですけれど、そう考えたら、やっぱり文化人類学会の方が広いんじゃないかと思ったりするのです。その辺のご意見をうかがわせていただけると嬉しいです。

**若林**—— 北海道には文化人類学系の学会が2つありまして、片方は日本文化人類学会北海道支部という名称です。もう1つは日本文化人類学会と関係があったんですけど、今は独立している北海道民族学会です。で、そこを区別するための名称というところもあったわけなんですけれど、そこを含めて議論することと捉えてよろしいんですか？

**岡田**—— それを区別するために北海道民族学会という名称になったんですか？

**若林**—— そういうわけではないんですけども、そういう状況になってしまっているんです。

**岡田**—— でも別にかまわないじゃないですか。それは何を名乗ろうと遠慮することはないと思います。

**岩崎**—— 大きなテーマでありますので、この時間で話しきれものではないと思います。どなたか一言意見を。私はこう感じていますということがありましたら。

**林**—— その議論の時に、実を申しますと私は「北海道民族学会」でお願いしたいとすごく強く発言させていただきました。個人的な理由ですが、教育を「民族学」で受けてきたということや、比較民俗学もやっていたため、民族学会という名称に思い入れがあったのかもしれない。その後、本会は日本文化人類学会の地方会という位置づけがなくなったので独自性が今の名称にはあるように思います。ただ、あれからかなり時間が経っていますので、「名前を変えては」という議論を再開させてもよいように思います。もしかしたら日本中を眺めても「民族学会」を名乗っているのは私たちだけかもしれないですね。

**野口**—— ちょっと事実関係だけを確認させて頂きたいんですけど、フォークロアの民俗学のほうの北海道民俗学会って今あるんですか？

**林**—— あります。札幌大学を退職なさった宮良高弘先生が立ち上げた「北海道みんぞく文化研究会」で、『北海道を探る』を発行していました。ただ先生が病氣療養中ということで現在は活動が継承されてはいないようです。

**野口**—— 日本民族学会、「族」（やから）の民族学会が日本文化人類学会に名前を変えたもっとも大きな理由が、「ニホンミンゾクガツカイ」というのはひらがなで書いた場合 2 つあるので、区別をつけるためなんです、と大学の授業でしゃべっているんですけど。それと同じような問題が北海道でもあるとすれば、真剣に考えるべき問題だと思いますが、それがないのであれば、今までこうして来たわけですし。民族学と文化人類学ということになると、どっちが広くてどっちが狭いのかということが僕は感覚的にはわからないんですよね。

アメリカンエスノロジストもアメリカンアンソロポロジストもたしか同じような団体の下部組織がそれぞれ出しています。まあ、アメリカの場合はアメリカンエスノロジストという雑誌が堂々とあるわけですし、対等に同じように投稿している人もいるわけです。どこがどう区別されるべきか、僕自身わからないものですから、なにか積極的に変えるべき理由があるのであれば、真面目に考えるべきなのかもしれないんですけど、どうも積極的に変えるべき理由があるようには、僕には思えません。

**甲地**—— 私も今の意見に賛成で、確かに民族学という言い方は最近あまりされないですし、文化人類学という名称が多くなっていますけれども、そこにはいろんな歴史経緯があると思うんです。なおのこと、ここの民族学会でいうところの民族とはなにかということをしつかりさせないと、名前だけ変えてもということになりますし、個人的な好みでは、北海道民族学会の方が好きです。

**岩崎**—— この問題に関しては、今後考えていく題材を淳子先生からいただいたというような気がします。時間的にはもう、予定の時間になっているんですけど、淳子先生が激

動の時代とおっしゃったのが気になって、ちょっとだけでいいんですけどその話をしていたらいただければと。

**岡田**—— なかなか言葉を選ぶのが難しいと思いますが、もともとこの北海道支部は日本民族学会から支部費をいただいて運営していたんですね。それが、入って来なくなってしまったのです。そこで、そのことについて日本民族学会に質問状を書きました。すると、北海道にお金を送ってくれているのだが、事務局に届いていないということがわかりました。それはおかしいんじゃないかと思いましたが、日本民族学会の会員に還元するもので、それ以外の会員がいるところには渡せないということでした。そんな閉鎖的な会にしたいくはないし、学会は2つに分かれてしまうようなものでもなく、一緒にしたくない人はしなくていいんじゃないかということで、この会はそのまま続いてきたと思います。

私は創刊号に書きました。北海道とアラスカは非常によく似ています。日本の北海道、アメリカ合衆国のアラスカ州ということで、出来た年代も同じです。アラスカ人類学会はアメリカ人類学会の下部組織で非常に発展してきているのです。だから、アラスカがやっているような学会にしたいと思いました。それは、そう簡単ではないかもしれないけれど、北海道民族学会も皆さんの努力で結構発展をとげて、今日の発表を聞きましても、とてもいい研究会だったと思うのです。でもこれは民族学ではないんじゃないか。文化人類学ではないかとも思いました。激動のあたりはそのくらいでよろしいでしょうか。

**岩崎**—— ありがとうございます。ちょっとだけ激動の時代のさわりを聴かせてもらって、北海道民族学会の歴史がわかったような気がします。ありがとうございます。

(いわさき・まさみ／北海学園大学)